

省略現象から見えてくること

－「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語－

企画責任者・発表者：生越直樹(東京大学)

発表者：尹盛熙(関西学院大学)

金智賢(宮崎大学)

新井保裕(東洋大学)

1. はじめに

本企画は、「省略」という現象が日本語と韓国語においてそれぞれどのような形で実現するのかを記述・分析することで、省略傾向の違いが両言語の構造的類似点及び相違点とはどのように結びつくのかを考察するためのものである。さらに、様々な省略データの観察を踏まえ、名詞述語構造における日韓の違いに焦点を当てることにより、言語の個別性と普遍性、言語要素と言語外要素の関連性といったより広い範囲の議論に発展させることを模索したい。

母語話者にとって「何か省かれている」という直感をもたらす言語表現は語・句・文・談話と、あらゆるレベルで観察される上に、様々な言語外要素の影響を受けることから、学際的なアプローチが求められるものである。省かれる要素は文脈などの他の情報から補えるものであるという普遍的な方向性はあるものの、個別言語の省略形式を詳細に観察すると、具体的に「何が省かれて何が残るか」は一様ではなく、構造的に多くの共通点を有する日韓両言語の間でも違いが見られる。

例えば、日本語では「いい気持ち！」というように名詞止めの文の形を取る場面で、韓国語では「kipwun-i cohta (気持ちがいい)」¹と形容詞述語文の方が好まれる現象が指摘されてきた。また日本語の場合、韓国語に比べて述語を省略しやすいという傾向があり、「これからどちらへ？」のように文が述語ではなく名詞(句)で締めくくられている例がしばしば観察される。さらに、前提を省略する「僕はウナギだ」タイプの文は韓国語より日本語の方が生産的であることを指摘されており、SNSなど新メディアにおける日韓の言語表現でも日本語の方が省略を好み、韓国語は文の完全性を求める傾向が観察される。以上のような多角的な観察は、日本語の言語単位が高い独立性及び結合性を持つこと、韓国語はそれと同程度の言語単位では独立性を持たず、ある程度の言語単位の融合性が成立するとなかなか崩れにくいこと、言い換えると、日本語の「磁石」的な構造、韓国語の「チェーン」的な構造とも言うべき特徴を示すものと言えるだろう。

以上の趣旨のもと、本企画では、日韓の省略傾向と名詞述語構造の違いに焦点を合わせ、名詞止め文(本発表ではコピーラなしで名詞で終わる文を「名詞止め文」と呼ぶ)、名詞述語と機能語の省略、二項名詞文、SNSにおける省略という観点から、両言語の持つ特徴を明らかにしようとする。これらのアプローチは、これ以外の日本語と韓国語の省略現象と、両言語の構造的な違い及び言語外要素の関連性などを分析していく上での礎となるであろう。

2. 名詞止め文の日韓対照(生越直樹)

「きれいな花!」「これから学校?」「起立!」などの名詞止め文は、日本語ではしばしば用いられ、その構文的構造も様々である。文法構造が似ていると言われる韓国語においても、名詞止め文は使用される。しかし、両言語では使われる文の構造や使用条件において差が見られる。本発表では両言語に見られる違いを指摘しつつ、その違いをもたらす背景について考えてみたい。

なお、日韓両語とも聞き返し(「ボルドリング知ってます?」「ボルドリング?」)や表現の言い直し(遅刻よ、遅刻!)で名詞止め文がよく使われる。聞き返しや表現の言い直しで名詞表現だけを使うことは、多くの言語で見られる現象である。本発表では、この種の名詞止め文は一旦除外して分析を進める。日本語と韓国語で書かれたドラマのシナリオから用例を収集したところ、日本語と韓国語で使われている名詞止め文は、大きく分けると次の4つの構文パターンで使われていることがわかった。本発表では、この4つのパターンごとに日韓両語の異同について見ていく。

¹ 韓国語のローマ字表記はThe Yale Romanization Systemによる。

- A. 名詞(句) (ハ/nun) 名詞(句) 「これ, プレゼント。」 「kuke-n way? (それは何故)」
- B. 形容詞(動詞)+名詞 「きれいな花!」 「hansimha-n nom (あきれた奴)」
- C. 連用修飾語+名詞 「そろそろ帰国?」 「今どこ?」 「「~ssi-lul wihaye kenpay. (～さんのために乾杯)」
- D. 名詞(疑問詞/数詞)一語のみ 「地震!」 「cikap! (財布)」

まずAのタイプを見てみる。Aのタイプは、基本的に主題部分と述部部分があり、述部部分が名詞で終わっている。たとえば、次のような例である。

- (1)a. あなたはお孫さん? <拝啓> b. ここは、神様のいるかまぼこ工場! <泣くな>
- c. これ、先週までのレポート<眠れる> d. これホンノ、あの時のお礼の気持ち<拝啓>
- e. 今日はね、学校のクリスマスのお稽古<拝啓> f. 名前はね時夫君。 <拝啓>
- g. (かまぼこを見ながら) かまぼこの新作?
- (2)a. kuke-n way? (それは何故) <冬> b. kuke-n pimil! (それは秘密) <冬>
- c. ne-n onul-to pamsaym cakep? (あんた今日も徹夜仕事) <キル>

このタイプは、(1a)(1b)のように、助詞ハが使われている例のほか、(1c)(1d)のようにハが省略されている例、(1e)(1f)のようにハにネが付く場合もある。さらに、(1g)のように場面上何を指しているかが明確なため主題が省略されている場合もCタイプに含まれるだろう。韓国語でも(2a)～(2c)のように、主題を表す助詞 nun/un (あるいは縮約形 -n) を含み題述文の構造を持つ名詞止め文が見られる。現時点ではそれほど多くの用例を収集していないので明確なことは言えないが、日本語に比べて韓国語の用例は少ない。また、日本語の例は述部の名詞に「先週までの」「あのお礼の」「学校のクリスマス」などの修飾語、それも複数の修飾語が付いている場合が見られるのに対し、韓国語の例は修飾語の付かない単純な構造が多い。また、way(何故)、pimil(秘密)という語は、一語だけでもよく使われる語であり、コンピュータなしで使いやすい語だと考えられる。このように、日本語と韓国語では、Aタイプの文の使い方かなり差があるようである。

さらに、質問に回答する(3)(4)のような例もAタイプと類似する用例とみることができよう。

- (3)a. 「どこ」「テーブルの上」<眠れる> b. 「動きって?」「“新・坂下”への人員確保」<拝啓>
- (4) “kukey nwuku-nya?” “lasupaykasu hothayl saepka.” (「それ誰?」「ラスベガスのホテル事業家」)<オール>

これらの名詞止め文は、「それは」「動きは」「kuke-n(それは)」という主題部が省略されていると見なせる。この種の例は、日本語でも韓国語でも使われており、韓国語では(2)のような主題部が明示される文に比べて、より複雑な述部の構造も見られる。(2)では新たな文を示しているのに対し、(4)は質問文で不明になっている部分を埋めるだけでよい。その違いが表現される構造にも影響しているかもしれない。また、日本語では(1g)のように、主題を省略した名詞止め文をいきなり使うことがあるが、韓国語ではそういう例があまり見られない。つまり、韓国語で(4)のような名詞止め文を使うには、明確な前提が必要なかもしれない。この点については、後ほどもう一度触れる。

次に、Bタイプを見ていく。このタイプは、気づきや感嘆の意味を伴うことが多い。「形容詞+名詞」にコンピュータがついた構文については、生越(2002)で取り上げたことがある。生越(2002)では、「きれいな花だ」のような主語なし名詞文をA+N構文と呼び、日韓両語の違いについて分析した。その結果、韓国語でA+N構文が使えるのは、話し手が示す新しい情報が第1要素(A)か第2要素(N)のどちらか一方のみの場合に限られ、日本語では2つの要素がともに新しい情報であってもA+N構文が使用可能だと指摘した。つまり、新たな情報が多い場合、韓国語でA+N構文を使うことができないのである。生越(2002)では、今回取り上げる名詞止め文について詳しい分析を行っていない。生越(2002)で扱った例文を名詞止め文にすると、日本語はすべて使えるのに対し、韓国語はほとんどすべて使えない。

- (5) (友だちABが道を歩いているとき、Aが何気なく道ばたを見ると、何かの花が一つ咲いている。見つけてすぐに花を指さしながら)
 - a. あっ、きれいな花! b. ?a, cham yeppu-n kkoch! (あっ、本当にきれいな花)
- (6) (窓の外を見ると、木の枝にめずらしい赤い鳥が止まっているのに気づいて)
 - a. あっ、赤い鳥! b. (?)a, ppalka-n say! (あっ、赤い鳥)

(7) (幼稚園で、子供が「先生」と言いながら花を持って来た。幼稚園の先生がその花を受け取りながら)

- a. きれいな花! b. ?cham yeypu-n kkoch! (本当にきれいな花)

シナリオの文を調べたところでも日本語ではこのタイプの文が使われているのに対し、韓国語ではほとんど出てこない。唯一使われているのは、(9)のように、人についての表現である。

- (8)a. 下手な漫画 <泣くな> b. うまそうな匂い! <眠れる>
c. 疲れた顔 <拝啓> d. ちゃんとした御挨拶 <拝啓>

- (9)a. ile-n hansimha-n nom. (このあきれた奴) <オール>
b. nappu-n saykki. (ひでえ野郎) <オール>

日本語ではこのタイプの文が具体的な事物の他に感覚や行為に対して使われており、その使用範囲は広い。一方、韓国語の(9)は、人を罵ったりあきれたりする時に使われる表現であり、かなり定型化された表現と見られる。これまでの調査結果から見て、韓国語では、目の前の状況を形容詞+名詞の形で表現するのは、かなり難しいようである。

次に、Cのタイプを見てみることにする。(10)(11)のような例が見られる。

- (10)a. クラブで接待<眠れる> b. そろそろ帰国?<眠れる> c. 玉子ちゃんお茶お願い! <拝啓>
(11)a. chenpayksipsa-pen kiminha isong!! (1114号 キムイナ移送) <オール>
b. minswuyen-ssi-lul wihaye kenpay. (ミンスヨンさんのために乾杯) <オール>

Cタイプの文は、文末の名詞が動作性名詞である点が特徴的である。この点は日韓両語に共通している。ただし、日本語に比べて韓国語は用例が少ない。(11a)は相手への指示文であり、単語を列挙するだけで指示を表わせる。この種の文は構造を持つ文ではなく単なる語の列挙と見なすこともできよう。(11b)も指示的な意味である上に、表現自体が固定的な表現である。日本語のように、様々なパターンでは使われていない。

最後のDタイプ、名詞一語で使う場合については、日本語も韓国語も様々な表現が使われている。両言語の使われ方には微妙な違いが見られるようであるが、現時点では明確な説明は難しい。今後の課題である。

以上、日韓両語の名詞止め文の使われ方について、文の構造に注目して分析してみた。日本語では、どの構造についてもかなり自由に使われている。一方、韓国語では、題述構造を持つ「名詞-nun(は) 名詞」の形では使用例が少ない上にその構造も単純であった。また、感嘆などを表す「形容詞+名詞」の形でも用例が少なく、固定的な表現がほとんどであった。これに対し、質問文に対する応答文では比較的名詞止め文が使え、複雑な構造の例も見られた。このことから、韓国語の名詞止め文は主題文や感嘆文という、いわば一人前の文としては使いにくく、すでにある文の不明点などを埋めたり補充したりする文の断片、語句として機能している可能性が高いと見られる。完成した文の一部を補ったり追加したりする場合なら、文の形を取る必要はなく、名詞止めでも使いやすくなる。本発表で扱った例の多くは、名詞止め文ではなく名詞句と呼ぶべきかもしれない。逆に言えば、韓国語で文として機能するには明確な述部要素が必要であると言えよう。一方、日本語では、述部要素がなくても文として機能する。日本語が名詞止めでも文として機能する背景には、場面や文脈の支えが関係していると考えられるが、ここではその可能性を指摘することと定める。

3. 述語における省略—日韓で構成素の結合様式はどう違うか (尹盛熙)

3.1 本節の概要

本発表では、日本語と韓国語の様々なテキストから、省略形式における日韓の特徴とそれを支える両言語の構造的な違いについて考察する。日本語では、名詞述語文におけるコピュラ(「~だ」)や動詞性名詞述語文の形式動詞(「~する」)などの機能語が韓国語の場合より省かれやすく、その結果、形態・統語的に不完全な述語が用いられる傾向がある。また動詞述語文における省略現象からは、実質語の述語でも同様の不完全性が見られることが確認できる。省略形式に見られるこのような違いから、語・句・文といった言語単位における構成素の結合のあり方が日本語は「磁石」のような様相を、韓国語は「チェーン」のような様相を呈することを主張する。

3.2 様々なテキストと省略の傾向

言語コミュニケーションでメッセージの送信者(話し手・書き手)は受信者(聞き手・読み手)に対し、限られた時間

と労力をできるだけ節約して多くの情報を効率よく伝えようとするため、文及び発話ではしばしば省略が起きる。無論、むやみに省いて短くするのはメッセージの伝達性が保たれないので、文脈から復元しやすい情報が優先的に省かれるなど、情報の損失が少ない方向で行われることになる。そのことから、具体的な指示対象を持たない「機能語」の方が「実質語」に比べて省略されやすいのは普遍的な傾向であると予測できる。構造的に類似点が多いとされる日韓の場合も、格助詞や形式動詞「する」「hata」、コンピュータ「だ」「ta/ita」などの機能語は、具体的な意味内容をもつ実質語に比べて省略されやすい。

一方で、両言語の様々なテキストを観察し、それぞれが示す形式的特徴を比較すると、日韓では省略の傾向が異なることがわかる。例えば日本語の場合、新聞記事やTVニュース、討論番組などの情報提供コンテンツ、そして漫画やアニメーション、ドラマなどのサブカルチャーコンテンツと幅広いテキストで、述語における省略が観察される。

- (1) a. 一郎、これは八軒君の仕事。(アニメ)
- b. 護身に銃所持が必要だと主張。(新聞記事)
- c. 米空母、しばらく日本海に(新聞見出し)
- d. 話があるんだ。ドーソン教授を?(翻訳字幕)
- e. 外に行ってくれてありがたいという言葉はひとつあったと。(討論番組)
- f. 我慢したからこそ最後にチャンスがきたと錦織。(ニュース)

上記(1)の各例は、下線部の後ろで何らかの形式が省略されている。(1a)では名詞述語文「～八軒君の仕事だ」よりコンピュータ「～だ」が、(1b)では「～主張した」という動詞性名詞文から形式動詞「する」が省かれており、それぞれ名詞が文を締めくくる「名詞止め文」になっている。(1c)から(1f)では実質語の動詞が省かれ(それぞれ「留まる」「知っているか」「いうわけだ」「語る」)、(1f)以外は助詞で文が終わる「助詞止め文」になっている。このように述語の一部または全部を省くと、それに付帯するはずのテンス・アスペクト・モダリティなどの文法形式も使用が制限されることから字数を制限しやすくなるため、省略戦略としては効果的であると言える。このように形態・統語的に不完全な述語を用いる形式は、新聞見出しや翻訳字幕のように時間的・空間的制約が強いテキストでより際立つ(尹, 2015; 2016)。

一方で韓国語の場合、(1)のような述語における省略は新聞見出しなど一部のテキストでは見られるものの、日本語ほど頻繁に用いられず、新聞見出しでは述語より助詞の省略が起きやすい傾向がある(尹, 2015)。言い換えれば日本語では、一部または全部が省かれた不完全な述語を用いることが有効な省略戦略になっている反面、韓国語では助詞が省略されて名詞(句)が連なった、複合語に近い形式を取ることが有効な戦略になっているとされる(尹, 2015; 2017b)。

日韓の省略戦略が異なることは、同一の事柄を報道した日韓の見出しを比較するとより明確になる(尹, 2017a)。

- (2) a. 対北朝鮮で新組織 米CIA (朝日新聞 20170512)
- b. CIAに対北専門組織 核・ミサイルの脅威分析 (読売新聞 20170512)
- (3) a. mi CIA, pwukhaykcentam ‘kholia immwuseynthe’ sinsel (東亜日報 20170512)
米CIA 北核全担 コリアミッションセンター 新設
- b. CIA, pwukhayk-man kwanli-hal thukpyelcocik mantul-ess-ta (朝鮮日報 20170512)
CIA 北核のみ 管理する 特別組織 作った

(2)と(3)は同一の事柄を報道しているが、日本語例(2)では、下線部の名詞句と関わる内容上の述語が明示されていない。例えば(2b)の場合、記事本文には「朝鮮ミッションセンター」を新設したと発表した」と述語が用いられているが、見出しだけでは「対北専門組織」が他の成分とどのように関連付けられるかは明確ではなく、読み手の推測に委ねられることになる。一方で韓国語例(3)では、(2)の下線部に相当する「kholia immwuseynthe (コリアミッションセンター)」「thukpyelcocik (特別組織)」などに対して、「sinsel (新設)」「mantul-ess-ta (作った)」という意味上の述語がそれぞれ明示されている。

- (4) a. 外に行ってくれてありがたいという言葉はひとつあったと(「朝まで生テレビ」20171124)
- b. 我慢したからこそ最後にチャンスがきたと錦織。(「NHKニュース7」20171031)
- (5) kwukmin-tul-i ihayha-ki himtu-n thayto-ka ani-nka sayngkak-ul ha-pnita.
国民が 理解しがたい 態度ではないか 思います(「pamsaymtholon(徹夜討論)」20170224)

上記(4)では下線部の最後に引用助詞「と」が位置しているが、その助詞を要求する動詞が続かない。例えば(4b)はあるテニスプレイヤーが「我慢したからこそ最後にチャンスがきた」と述べたことを取り上げているが、「と」の後には「いう」「語る」などが省かれたと考えられるだろう。一方で韓国語の場合は、日本語のように動詞を省いて「と」に相当する「ko/lako」で文や発話を止めるのはかなりぎこちない。実際、自然発話に近い生放送の討論番組で観察されるのは、引用助詞と動詞の両方を省いて補文の中身だけを発話するか、または(5)のように動詞は残して引用助詞だけを省く、どちらかのパターンがほとんどである。

3.3 日韓の構造的特徴の違いに向けて—「磁石」と「チェーン」？

以上、日韓の省略傾向における違いを述語の省略に焦点を当てて観察した。本節のまとめとして、これらの省略傾向が日韓の言語的特性の違いとはどのように関連付けられるのかについて現時点での方向性を述べ、今後の課題としていくつかの関連現象にふれておきたい。

幅広いテキストにおける観察から、日本語では、述語における機能語及び実質語の省略が韓国語に比べて頻繁に表れ、形態・統語的に不完全な形の述語の発話が比較的容認されやすいことを見た。それに比べて韓国語では、日本語のような名詞止め・助詞止めの形式は制限されることから、述語を含む言語単位に形態・統語的完全性が要求される傾向が強いと言える。即ち日本語の場合、文や発話が文章の体裁を取りながらも述語が不完全で、文の末尾が途切れたような印象を与えることになる²が、その点、韓国語の場合、文のレベルでは述語を中心とした「文」としての形を、語のレベルでは形態的に「語」と言える形を保つことをよしとする傾向が存在するのである。このことから、日韓では言語単位を構成する方式が異なると考えることができる。

音や語・句などの単位が結合してより大きな構造を構成するのは言語の普遍的な特性であるが、その結合の仕方には個別言語的な違いがあるものと考えられる。その違いをイメージしやすく例えるなら、日本語は、結合する要素同士が磁力のみでつながり、結合部で比較的簡単に離したりくっつけたりできる「磁石」、韓国語は結合する要素同士で決められた型があり、それが合えばしっかりかみ合って切り離しにくい「チェーン」のような様相を呈していると言える。

さらに、従来の研究で指摘されてきた両言語の違いも、この傾向と同一の脈絡で理解することができる。例えば日本語の場合、話しことばでは「あつ(い)」「うま(い)」など、イ形容詞の語幹のみが独立した発話となることがあるが、これも述語の完全性にこだわらない日本語の特徴的な部分と言えるだろう。また、「40℃もの熱(=40℃もある熱)」など、連体修飾句において述語の代わりに「の」が用いられるという例も、前後の成分から意味関係を想定しやすい述語を省略し、残りの成分を助詞でくっつけているものとして理解できる³。他にも「～系」「～的」などは、形態素や語に相当するものを要求する接尾辞として用いられる一方で(「日系」「亭主関白的」など)、句や文といった統語的単位とも結合する例があることが知られている。併せて、「[先月使った電気]代」や「[やっと間に合った]状態」(新屋, 2012)で見られるように、統語レベルの単位が複合語の一部として現れることも指摘されているが、いずれの場合も、該当する韓国語の形式は容認度が下がる。

本発表で取り上げた省略現象の違いや結合様式の違いは、上記の関連現象に加え、従来より指摘されてきた日本語の「名詞志向」と韓国語の「動詞志向」(金恩愛, 2003; 堀江・パルデシ, 2009)、日韓の文法化の程度の違い(塚本, 2012)などとも関連する可能性がある。これらの問題に対する詳細な検討は今後の課題としたい。

4. 二項名詞文の日韓対照(金智賢)

「AはB」及び「AはBだ」型文を二項名詞文と呼ぶことにする。二項名詞文は、AとBが一般的な意味関係にある普通の名詞文とそうでないものがあるとされ、後者は「ウナギ文」と呼ばれてきた。両者は本質的に違わないという見解も窺えるが(尾上, 1982; 柏谷, 1998; 西山, 2003a; 丹羽, 2005等)、日本語の外からの観点を含めて、より精密な記述が必要と思われる。本節は、ウナギ文と「だ」の意味について対照言語学的な観点から有意義な記述を与えることを目指す。

4.1 問題提起

韓国語にも「は」「が」「だ」に対応する「nun」「ka」「ita」が存在するだけに、(1)や(2)のような普通の名詞文(いわゆる指正文や指定文)では広い範囲で対応が見られる⁵。また、(3)や(4)のような一部のウナギ文でも対応が見られる⁶。

² 「ここ、めっちゃ寒いんだけど」のように「～けど」「～し」などの接続形式で締めくくられる文も関連現象として理解できるが、このような文を称する「中斷節」(Otori, 1995)や「言いさし文」(白川, 2009)などの用語にも、「文が途中で切れたかのように見える」という認識が反映されている。

³ 他にも「母へのプレゼント(=母へ贈るプレゼント)」「東京までの列車(=東京まで行く列車)」などがある(日本語記述文法研究会, 2009)。

⁴ 「私さ、[人のオーラ]的なものが見える]丞女子なんだけど」(アニメ「斉木楠男のΨ難」)

⁵ 「は」、「が」、「だ」に対応する韓国語形式はそれぞれ「nun/un」、「ka/i」、「(i)ta」である。本文では、代表形式として「nun」「ka」「ita」と表す。

⁶ 「は」と「が」が「nun」と「ka」にそのまま対応するわけではない。これら助詞のズレの一部については金智賢(2016)で論じている。

- (1) a. kay-nun tongmwul-ita. (2) a. cey-ka kansa-ipnita.
 b. 犬は動物だ。 b. 私が幹事です。
 (3) a. na-nun nayngmyen. [場面Ⅰ, Ⅱ] (4) a. na-nun nayngmyen-ita. [場面Ⅱ]
 b. ぼくは冷麺。 [場面Ⅰ, Ⅱ] b. ぼくは冷麺だ。 [場面Ⅱ]

ところが、日本語では自然な文が韓国語では言えない場合も多々ある。

- (5) a. *na-nun nayngmyen-ita. [場面Ⅰ] (6) a. *sinmwun-un kothassu wi-ta.
 b. ぼくは冷麺だ。 [場面Ⅰ] b. 新聞はこたつの上だ。
 (7) a. *ne-nun yeyppun nwun-ikwuna. (8) a. *talo-nun naccam-ita.
 b. 君は可愛い目だなあ。 b. 太郎は昼寝だ。

(6)～(8)のような文もウナギ文と見るなら、韓国語は言えるウナギ文と言えないウナギ文があるということになる。韓国語にもウナギ文があるということはすでに言われているが、どこまで言えて、日本語のウナギ文とはどう違うかに関する詳しい分析はなかった。本稿では、上記の〔場面Ⅰ〕と〔場面Ⅱ〕を分析することで、その条件を考える。

4.2 前提と「だ」「ita」の働き

奥津(1978; 1981)等では「ぼくはウナギだ」も「ぼくはウナギ」も同じウナギ文とされる。ここでは、「AはBだ」型の文と「AはB」型の文を区別し、レストランでの場面を〔場面Ⅰ〕と〔場面Ⅱ〕に分けて観察する。これらの規定と、各場面想定されるウナギ文に先立つ発話—これを「前提」と呼んでみよう—は次のようである。

- (9)〔場面Ⅰ〕複数人でレストランに入り、メニューを見ながら注文料理を決めるといった場面。

〔前提〕君は何にする？（「AはBにする」）／君は何を食べる？（「AはBを食べる」）

〔可能文型〕日本語：「AはB」「AはBだ」 韓国語：「A-nun B」

- (10)〔場面Ⅱ〕すでに決まった注文料理を確認する場面、または、店員が料理を持ってきて注文を確認する場面。

〔前提〕君は、注文料理は何か？（「Aは、RがBだ」）

〔可能文型〕日本語：「AはB」「Aは（Rが）Bだ」 韓国語：「A-nun B」「A-nun (R-ka) B-ita」

〔場面Ⅰ〕と〔場面Ⅱ〕の違いは、前提の中に「Rが」が明示的にあるかどうかという点である。韓国語は主語としての「Rが」が前提されなければ「B-ita」は使われにくいのである。一方、日本語は「Rが」が前提されない〔場面Ⅰ〕でも「Bだ」と言えることから、次の二つの可能性が考えられる。(i)日本語話者は前提されない「Rが」を想定して「Bだ」と言う、(ii)「Bだ」は対応する「～が」がなくても用いられる。もし、前者なら「だ」は「B」を述語化していることになり、後者なら「だ」はそのような機能はなく、別の意味を表すために用いられていることになる。

4.3 「は」と「nun」の働き

「AはB」型の文は、韓国語も場面と関係なく使われる。これは、「は」や「nun」がともに、話し手の判断によって、二つの概念を結合し一つの事態として表現する機能を有するためである。〔場面Ⅰ〕と〔場面Ⅱ〕における「AはB」型の文は、どちらもこのような働きによるもので、「ぼく」と「注文料理」を単に結ぶことで、「ぼくはその料理を注文する」「ぼくが注文したのはその料理だ」などの意味を間接的に伝えており、前提の「Rが」と関係なく用いられていると考えられるのである。ところが、以下のように、「は」と「nun」のこのような機能にも差が見られる。

- (11) a. konyak-un sal an ccye. (12) a. *i naymsay-nun kasu-ka say-ko iss-ta.
 b. コンニャクは太らないよ。 b. この匂いは、ガスが漏れている。

「は」は、統語的にかなり離れた要素も結合するが、「nun」は、先行名詞句とそのあとにくる事態が統語的に緊密な関係にある場合に限って用いられる傾向がある。「だ」に関して前述の(ii)をとるなら、〔場面Ⅰ〕の日本語の「AはBだ」は、このような「AはB」に何らかの意味を表すために「だ」がついたものであると考えることができる。〔場面Ⅰ〕の「AはBだ」の「だ」は統語的な述語を表すのではなく、聞き手に発話内容を強調して提示するという話し手の態度を表す終助詞のような働きをしているものではなかろうか。即ち、次の「だ」と同類のものと見ることができるのである⁷。

- (13) 水だ！（水をくれ！） (14) 深呼吸しよう。瞳、できるね？ 深呼吸だよ。
 (15) よろしくだぞ。 (16) その船がだ。嵐の中であったという。

4.4 〔場面Ⅰ〕の「Rが」をめぐる

⁷ 尾上(1982)も、ウナギ文の「だ」はこれらの文の「だ」と同じであるとしている。なお、ウナギ文の「Bだ」を述語と見るか否かで先行研究の立場は分かれるが、尾上(1981; 1982)及び「だ」を述語代用と見る奥津(1978; 1981)や久野(1978)等以外は、大体「Bだ」を述語と見ているようである。メトニミー説の瀬戸(1984)や坂原(1990)も、「A」が「AのR」を表していると見ているので、「Bだ」は述語扱いされていると見ることが可能である。池上(1981)は、「A」と「B」が「だ」の存在概念によって結びつけられるとしてはいるが、「A」と「B」の結合に注目した点では尾上氏の議論と相通するものがある。次の脚注も参照。

ウナギ文を「Aは(Rが)Bだ」と分析する見解は多くの先行研究に見られる⁸。本稿では、[場面Ⅱ]のウナギ文のみがこの構造をしていると見たが、[場面Ⅰ]の「AはBだ」が「Aは(Rが)Bだ」で、日本語話者は前提されない「Rが」(注文料理が)を想定していると仮定してみよう。その場合、「だ」は「Rが」の統語的な述語となり、様々な統語的作用を受けることになる。ところが、実際は「だ」はそれが難しいと考えられる。例えば、[場面Ⅰ]で注文を変更する場合、(17a)のように、否定の後の「だ」は不自然か、少なくとも[場面Ⅱ]の注文を再確認する(17b)より制約がある。

- (17) a. [場面Ⅰ] ぼくは(注文料理が)冷麺だ。いや、冷麺じゃなくて{お寿司にする/お寿司がいい/?お寿司だ}。
 b. [場面Ⅱ] ぼくは(注文料理が)冷麺じゃなくてお寿司だけど。

韓国語は[場面Ⅰ]で「ita」が使えないので、当然注文を変更する文にも「ita」は現れないが、韓国語の場合[場面Ⅰ]と[場面Ⅱ]とでは別の否定形をとることで、これらの文が統語的に異なることがはっきり示される。[場面Ⅰ]の「malko」は「選択」の取り消し、[場面Ⅱ]の「i anila」は「ita」の否定をそれぞれ表す。

- (18) a. [場面Ⅰ] na-nun nayngmyen. ani, nayngmyen malko {chopap halkey/*chopap-iyay}。
 (ぼくは冷麺。いや、冷麺じゃなくて{お寿司にする/*お寿司だ})
 b. [場面Ⅱ] na-nun nayngmyen-i i anila chopap-intey。
 (ぼくは冷麺じゃなくてお寿司だけど)

[場面Ⅰ]の「AはBだ」の「だ」は、少なくとも「Rが」の統語的な述語ではないと言えよう。

4.5 「Rが」の性質と二項名詞文の連続性

これまでの議論によると、日本語でウナギ文とされてきたものは「AはB」、「Aは(Rが)Bだ」の3種類に分かれる。韓国語は「AはBだ」型の文を有しないが、「AはB」及び「Aは(Rが)Bだ」型の文は多くある。ここでは、「Aは(Rが)Bだ」を中心に観察し、この種の文にも日韓で違いが見られることを示す。(6)~(8)の韓国語表現が不自然なのは、一次的には「Rが」が明示的ではないことによる。ところが、韓国語でも類似した以下のような文は可能である。

- (19) na cikum cip aph-iyay. (20) cip-i sewul-ipnita.
 (私今家(の)前だよ) (家がソウルです)
 (21) ku-nun pemcohyeng elkwul-ita. (22) kwukcang-i kyelkun-ita.
 (彼は犯罪型(の)顔だ) (局長が欠勤だ)

(19)と(20)は「R」が「在り処」を表す場合であるが、韓国語は人やそれ自体が場所になるもの(家、トイレ、山など)の在り処を表す「ita」文なら自然であるが、(6)のような物の在り処は「ita」で表せない。(7)と(21)の「R」は、それぞれ「(君の)目」「(彼の)顔」と類似しているが、韓国語では「顔」は人間を描写する際に明示的な前提と見なされ「目」「手」等はそうでないようである。(8)や(22)も似たような対立を見せる。韓国語では「当該場所で一般的に行われる行為」は「R」として前提されるが、「誰かが特定の時間に行う具体的な行為」は「R」になり得ないのだと考えられる。(6)~(8)も、適切な前提があれば言えるようになるが、それは普通ではないかなり特殊な状況になるだろう。以上の議論は、「Rが」の明示性というものが単に文脈に委ねられるというのではなく、ある程度定型化できることを示す⁹。

4.6 本節の結論

日本語も韓国語も、表現において「主題—解説」型が重要な構文の一つになっており、語順や省略が比較的自由という特徴から、他の言語に比べウナギ文が成立しやすい構造であると言える。ところが、ウナギ文を(I)「AはB」、(II)「AはBだ」、(III)「Aは(Rが)Bだ」に分けた場合、韓国語はタイプ(II)はなく、タイプ(III)も「R」の制約により日本語ほど生産性が高くなかった。これまで英語など日本語以外の言語にもウナギ文があるという指摘がしばしばあったが、その言語がウナギ文の一部のタイプだけを有するといった可能性も十分にある¹⁰。なお、「だ」や「ita」の働きの違いにも注目すべきである。「ita」は明示的な主語が前提されなければ用いられにくいことから統語的述語を形成する働きが中心であると言うことができるが、「だ」はそうではない場合もあることを観察した。どちらかという、先行研究ではウナギ文の「だ」を述語化詞と処理しようとする傾向があった。しかし、本節で論じてきた通り、タイプ(II)の「だ」までそのように扱うのは妥当ではないと考えられる。これは、「繫辞(コピュラ)論」とも関わる問題であり、「は」との関係をも考慮した上での、より精緻な議論が必要になるだろう。

⁸ 川本(1976)、堀川(1983)は「Rが/は」の省略を主張し、西山(2003a; 2003b)もウナギ文の論理形式を「Aは、[RはBだ]」と見ることによって結果的に同じ主張となっている。北原(1984)や仁田(1980)は「ぼくが注文するのはウナギだ」のような分裂文構造を想定しており、やはり前提されない部分を「Bだ」の主語として復元していることが分かる。

⁹ 小屋(2003)や丹羽(2005)は「R」の分類を試み、普通の名詞文とウナギ文は連続しているとしているが、丹羽(2005)で言うように、同じ名詞文でも自立性・文脈独立性に違いがあることやそれに伴う「R」の多様性を考えると、このようなアプローチ自体間違っていないと言えよう。

¹⁰ Bolinger(1968)が一般的ではない文の「I am the soup」が言える場面として紹介しているのは、本稿の[場面Ⅱ]に当たる。

5. 日韓 SNS における省略現象とその背景 (新井保裕)

インターネットが発達して数多くのメディアが誕生した昨今、メディアによってその特徴は様々であり、個別言語だけでなくメディアによっても省略現象が多様化していると考えられる。前節まで話しことば・書きことばテキストに現れる省略を現象別に扱ってきたが、本節ではメディアに焦点を当て、日韓で多く使用される SNS (Social Networking Service) における省略現象の日韓対照を行い、その背景を探る。

5.1 SNS と調査方法

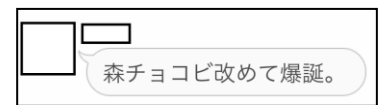
SNS とは、人と人の繋がりである「社会的ネットワーク」を維持し、また拡大することを目的としたインターネット上のサービスを指す(渡辺他(編), 2011)。最近では Social Media と称されることも多く、メディア研究では多くの関心を集めている(藤代(編), 2015 など)。言語研究の分野でも近年注目され、研究成果が発表されつつある¹¹。本節ではこうした SNS のうち、主要なものである Twitter¹²と LINE, KakaoTalk¹³を扱い、省略現象の日韓対照するが、必要に応じて先行研究や他 SNS のデータも使用する¹⁴。

5.2 SNS における名詞止め文とその諸相

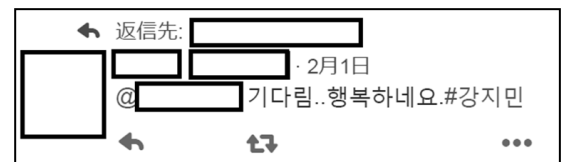
日本語と韓国語の SNS を比較すると、名詞止め文、特に名詞述語文のうちコピュラ「～だ」「～ita」が現れないもの、漢語(漢字語)動詞述語文のうち形式動詞「～する」「～hata」が現れないものが、韓国語より日本語で多く見られることがわかる¹⁵。



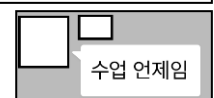
SNS に限らず、日本語の書きことばや話しことばでは名詞志向性が観察されることが金恩愛(2003)や新屋(2014)で指摘される¹⁶。特に金恩愛(2003)では日韓対照を行い、日本語の名詞止め文が韓国語ではコピュラを伴って動詞構造化した類型を指摘している(日本語: あおいって誰? / 韓国語: aoi, nwukwuya?). また井上・金河守(1998)は日本語と韓国語の名詞述語を対照し、日本語では名詞が持つ潜在的な動詞性が名詞述語文全体に比較的容易に受け継がれる一方で、韓国語ではそうしたことが困難だという原則を引き出している(日本語: まもなく東京駅に到着です。 / 韓国語: kot tongkyengyek-ey tochak-ha-keyss-supnita. ??kot tongkyengyek-ey tochak-i-pnita.). こうした名詞述語の動詞性も日本語の名詞志向性に含めることができるだろう。SNS で韓国語よりも日本語の方が名詞述語文が多く見られるのは、こうした日本語の名詞志向性が反映されているためと考えられる。



一方、韓国語では、コピュラや形式動詞を残し、用言語幹に名詞化辞「～m/um」が接続している例が名詞述語文、動詞述語文共に多く見られる(例: kitali-m(待つ), 例: swuep encyey-i-m(授業いつだ))¹⁷。しかしこれらは形式として名詞化語尾が接続しているだけで、意味上



は名詞的な意味は含まれていない。特に下例は日本語では「授業いつ__」と名詞止め文と表現されることが多いと思われるが、韓国語ではコピュラを省かず動詞構造化し、さらに名詞化辞をつけて表現しているのが非常に対照的である。相対的なものではあるが、日本語の名詞志向性と対照的に韓国語の動詞志向性が反映されていると言える。またこうした名詞志向性、動詞志向性と関連するが、日本語は名詞という言語単位だけでも文を表現する一方で、韓国語は動詞という言語単位に名詞化辞という節成分をつけることでより「文らしい」形で文を終結させる傾向があると考えられ、文に求める完全性が日韓両語で異なるという言語構造の差異から捉え直すことができる。



5.3 SNS における「ツイタ構造」とその諸相

日本語の Twitter を観察すると、『「写真または位置情報」+「ツイタ系表現」(着いた, 来た, 到着など、目的地に到達したことを表す動詞過去形や名詞)』という「ツイタ構造」が見られることがわかる。この構造は、日本語の話しことばや書きことばはもちろん、Twitter 以外の SNS にはあまり見られず、Twitter に特徴的である。

韓国語でもこのような表現構造が見えるが、その数はかなり少ない。その数少ない例も、「ツイタ系表現」だけ表すの

¹¹ 先行研究は紙幅の都合上、割愛する。

¹² Twitter は 140~280 字以下の短文(Tweet)を投稿及び共有するウェブ情報サービスである。

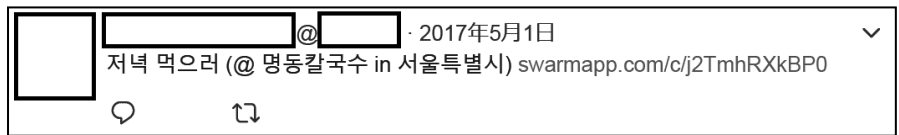
¹³ LINE, KakaoTalk はメール(1:1 トークやグループトーク)やビデオ通話、音声通話を無料で使用できるコミュニケーションアプリである。

¹⁴ 本発表では日韓の違いに注目するため、メディアにおける異なりは考察の対象外とする。新井(2018)は Twitter とその他 SNS における日韓省略現象を比較し、言語だけでなくメディアによる違いを指摘し、言語とメディアの関係を探っている。

¹⁵ 日本語ではコピュラが省かれているのか、形式動詞が省かれているのか曖昧な例が多い理由は後述する。

¹⁶ 金恩愛(2003)では「名詞志向構造」、新屋(2014)では「名詞指向性」という術語が用いられているが、本稿では「名詞志向性」で統一する。

ではなく、時間副詞や目的表現が共に現れ、到着した事実や、写真または位置情報が表す到達点だけを強調するわけではない。また近年は「ツイタ系表現」が省かれ、目的を表す表現、つまり「動詞語幹+le/u/e」だけを残す構造が顕在化している¹⁸。つまり例のように、『「写真または位置情報」+「動詞語幹+le/u/e」』という表現構造が現れている(例: cenyek mek-ule(夕食食べに))。本研究で収集した日本語 Twitter データではこうした目的表現のみが現れる例は見られず、韓国語 Twitter に特徴的な省略現象である。日本語では到着した事実や到達点を強調して表す一方で、韓国語ではそれらだけを強調するのではなく、目的や様相も伴って表現する。一部の言語単位だけに焦点を当てるのではなく、複数の言語単位を組み合わせており、やはり「文らしい」完全性が高いと考えられる¹⁹。



5.4 SNS における文末詞用法とその諸相

ここまで Twitter や LINE, KakaoTalk のデータを通じて省略現象を観察し日韓の違いを言語構造面より明らかにしてきたが、既存研究で指摘される省略現象もそうした捉え方が可能であることを示していく。堀江・金廷珉(2011)では文中形式が文末詞として機能する日韓語例として「～し」「～myense」や「～みたいな」「～tanun」を挙げ、両言語における「文中形式」から「文末形式」への変換というプロセスの生産性は、SOV 言語における語用論的意味変化の開始地点の「文末」の重要性を示していると述べた。韓国語の「～tanun」は次のように、インターネットの普及とともにウェブのブログ、掲示板などを中心に多く使用されている。

(1) 《ビールの写真つきのブログで》 saylo nao-n maykcwu nemnem masiss-tanun…
新しく出たビール. とてもおいしいという… (=堀江・金廷珉(2011) (19))

(2) … cey-ka cohaha-nun kes-tul-lo-man sikhy-ess-tanun ㄷㄷ
… 私が好きなものばかり頼んだという (笑いの絵文字) (=堀江・金廷珉(2011) (23))

堀江・金廷珉(2011)では、これらの例では「～tanun」という形式の次に本来来るべき名詞が後接せず、「～tanun」が単独で文を終えていることが述べられている。しかし日本語の「～みたいな」と対照すると、韓国語の「～tanun」は写真や記号などの視覚情報を伴い共起することが多いのは注目に値する。文中形式から文末詞へと機能変化が起こっている一方では、やはりまだ独立した文末詞としては用いられづらく、文中形式の従属性が「～tanun」には残存していると考えられるかもしれない。ここでも一部の言語単位が日本語は独立性が高く使用される一方で、韓国語は従属性が高く、より「文らしい」形で実現している傾向が見て取れる。

5.5 小結

本節では日韓 SNS における省略現象を一部ではあるが取り上げ、その背景を探った。メディアによって省略表現が多様化している一方で、その背景にはやはり日本語の「磁石」的な構造と韓国語の「チェーン」的な構造という日韓両語の構造的な差異が潜んでいることが確認された。

付記 本発表は科学研究費補助金(16H03413 及び 17K02734)による研究成果の一部である。

参考文献

新井保裕 (2018). Twitter を中心とした SNS における省略現象の日韓対照研究—言語とメディアの関係を探る—, 韓国日本語学会 2018 年第 37 回国際学術大会発表論文集 韓国日本語学会 pp. 23-31.
아라이 야스히로 (2018). 생략현상 배후에 있는 한일 언어 구조 차이에 관한 일고찰 - Twitter 의 한 생략현상에 주목하여-, 中国韓国(朝鮮)語教育研究学会 2018 年度国際学術大会発表論文集 中国韓国(朝鮮)語教育研究学会 本稿脱稿時掲載頁未定.

¹⁷ 母音語幹, 1 語幹には「～m」, 子音語幹には「～um」が接続する。

¹⁸ 母音語幹, 1 語幹には「～le」, 子音語幹には「～ule」が接続する。

¹⁹ 日本語の「ツイタ構造」とそれに対応する韓国語表現については아라이(2018)で詳細な分析を行い、①品詞的観点、②意味的観点、③視点的観点、④描写的観点、⑤表記的観点という日韓言語構造の差が、その背後に潜んでいることを示唆している。

- Bolinger, D. (1968). Judgements of grammaticality. *Lingua* 21, 34-40.
- 藤代裕之(編) (2015). ソーシャルメディア論：つながりを再設計する 青弓社
- 堀江薫・金廷珉 (2011). 日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化—機能主義的類型論の観点から— 高田博行・椎名美智・小野寺典子(編) 歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する 大修館書店 pp. 193-207
- 堀江薫・プラシャント・パルデシ (2009). 認知言語学のフロンティア 5 言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—, 研究社
- 堀川昇 (1983). 「僕はどうなぐだ」型の文について—言葉の省略— 実践國文學, 24, 57-71.
- 池上嘉彦 (1981). 「する」と「なる」の言語学 大修館書店
- 井上優・金河守 (1998). 名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書—日本語と韓国語の場合 筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書 平成10年度 Part II pp. 455-470
- 柏谷直樹 (1998). 「うなぎ文」について 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会(編) 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集 汲古書院 pp. 1022-1039.
- 川本茂雄 (1976). 日本語の文法の特徴 金田一春彦(編) 日本語講座第1巻日本語の姿 大修館 pp. 55-89.
- 金智賢 (2016). 日韓対照研究によるハとガと無助詞 ひつじ書房
- 金恩愛 (2003). 日本語の名詞志向構造 (nominal-oriented structure) と韓国語の動詞志向構造 (verbal-oriented structure) 朝鮮学報, 188, (1)-(83).
- 北原保雄 (1984). 日本語文法の焦点 教育出版
- 小屋逸樹 (2003). もう一つのコンピュータ文—状態指定文とウナギ文の分析— 慶應義塾大学言語文化研究所紀要, 35, 43-67
- 久野璋 (1978). 談話の文法 大修館
- 西山佑司 (2003a). 日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句— ひつじ書房
- 西山佑司 (2003b). 指定文読みとウナギ文読みの曖昧性をめぐって 慶應義塾大学言語文化研究所紀要, 35, 195-214.
- 仁田義雄 (1980). 語彙論的統語論 明治書院
- 丹羽哲也 (2005). 名詞述語文, 形容動詞述語文, ウナギ文 日本語科学, 18, 5-24.
- 生越直樹 (2002). 日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方 —「きれいな花！」タイプの文を中心に— シリーズ言語科学4 対照言語学 東京大学出版会
- Othori, T. (1995). Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology, In Shibatani, Masayoshi and Thompson, Sandra A. (eds.) *Essays in Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. 208-218.
- 奥津敬一郎 (1978). 「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー— ころしお出版
- 奥津敬一郎 (1981). ウナギ文はどこから来たか 国語と国文学, 58-53, 76-88. (奥津(1978)の増補版に所収)
- 尾上圭介 (1981). 「象は鼻が長い」と「ぼくはウナギだ」 言語 10(2), 10-15.
- 尾上圭介 (1982). 「ぼくはうなぎだ」の文はなぜ成り立つのか 國語學：解釈と教材の研究, 27-16, 108-113
- 新屋映子 (2014). 日本語の名詞指向性の研究 ひつじ書房
- 坂原茂 (1990). 役割, ガ・ハ, ウナギ文 日本認知科学会(編) 認知科学の発展 Vol. 3 講談社 pp. 26-66.
- 瀬戸賢一 (1984). 「僕はウナギだ」のレトリック—ウナギ文はどこへ行くのか— 大阪経大論集, 159-161, 1029-1063.
- 白川博之 (2009). 「言いさし文」の研究 ころしお出版.
- 塚本秀樹 (2012). 形態論と統語論の相互作用 ひつじ書房.
- 尹盛熙 (2015). 新聞見出しにおける日韓の省略と縮約—形式的違いを中心に— 日本學報, 104, 33-50.
- 尹盛熙 (2016). 日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現 - 韓国語との対照分析 社会言語科学, 18(2), 19-36.
- 尹盛熙 (2017a). 日本語の述語における機能語の省略について 社会言語科学会第39回大会予稿集, 社会言語科学会.
- 尹盛熙 (2017b). 일본어와 한국어의 명사연결구성 - 헤드라인에 나타난 '주체' 와 '사건' 에 대하여- (日本語と韓国語の名詞連結構成 - 見出しにおける「主体」と「事件」について-) 日本學報, 112, 45-67.
- 渡辺武達・山口功二・野原仁(編) (2011). メディア用語基本事典 世界思想社

資料

- <泣くな> 泣くな, はらちゃん 岡田恵和 2013 日本テレビ放送網株式会社 <眠れる> 眠れる森 野沢尚 1999 幻冬舎 <拝啓> 拝啓, 父上 倉本聰 2006 理論社 <冬> 『冬のソナタ』で始める韓国語 ～シナリオ対訳集～ 安岡明子 2003 キネマ旬報社 <オール> 『オールイン 運命の愛』で始める韓国語 ～シナリオ対訳集～ 安岡明子 2004 キネマ旬報社 <キル> 킬미 힐미 1 진수완 2016 MBC 씨앤아니